

「国語総合」採録の唐詩における自然の情景描写について

——音に着目して——

阿部 正和

一 はじめに

稿者はこれまで『詩経』、『楚辞』、唐代以前の詩における自然の音に関する考察を行ってきた。これらは、それぞれのテキストが、自然の音をどのように「き（聴・聞）」こうとしているのか、そして音を通して世界をどのように把握しているのか、ということを示す明らかなにしよとする試みであった。

本稿はその研究の一環として、「国語総合」（九社二三種類^②）採録の唐詩を素材とし、音に着目して自然の情景描写について考察していくこととする。また今回の考察においては、大國眞希・安藤公美「〈音〉に注目した文学教育と環境教育の横断的研究序論」（『川口短期大学紀要』26号・12年12月）が提示する「テキストの〈風景〉化」という視点を参考とした。

両氏は、読むという行為の一つの働きとして、次のように「テキストの〈風景〉化」、或いは「読みの〈立体化〉」という視点を提示する。

読むという行為は、因果や意味をとらえる知覚と、情景やイメージを想起する感覚が動員され、それ等が交差衝突しながら、いわば立体的な行為空間として呈示される。その働きを例えれば、テキストの〈風景〉化と名付けるのであれば、〈音〉は、如何なる響きを示すのか。(p.11)

この後、両氏は島崎藤村の「夜明け前」（『中央公論』29年4月・35年10月）の一節を引用して、音が作り出す〈風景〉について説明する。さらに坂口安吾の「FACEに就て」（『青い鳥』32年3月）の「言葉には言葉の、音には音の、色には色の、もつと純粹な領域があるはず」という言葉を引きつつ、「古池や蛙飛び込む水の音」の水の〈音〉は、それは特権化される芸術性や芸術家特有の感覚ではなく、本来的にはいかなる読み手にも味わい得、その味わいの妙味は誰にでも深められるはずである、と主張する。そしてそのような「文学的な〈音〉」に着目したうえで、読み手はいかに観取し（聴取し）、それを共有しているのかという点（前掲論文p.20）を問題とする。

本稿では、両氏の指摘を参考としつつ、両氏が問題とする読み手が共有する音を、〈音〉の文化的・社会的コードと読み換え、唐詩において自然の情景（風景）が音によってどのように構築されているのかということを考え、そしてテキストの主体はその音をどのように「き（聴・聞）」こうとしているのか、ということをも「国語総合」採録の唐詩を素材として考えてみたい。

なお「国語総合」の発行者の番号・略称、教科書の記号・番号、書名については注②を参照。以下で取り上げる場合は、アルファベット記号で表示することとする。

二 情景を読むことと学習の手引き・脚問について

「国語総合」採録の唐詩の自然描写を考えるにあたって、まず新学習指導要領において「情景を読むこと」は、どのように考えられているのかを見ておきたい。新学習指導要領の「国語総合」「読むこと」の指導事項に、「文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わうこと。」とあり、そこに「情景」とは、文章に描かれている場面や自然の風景を指すが、文学的な文章では人物の心情の反映や象徴、物事が起こる予兆などとして設定されることが多く、これを把握することは人物の言動、置かれている状況を理解する上で重要な手掛かりとなる。」と解説している。

これをふまえ、大國・安藤両氏は、「作品に描かれた情景をどのように豊かな想像力をもってとらえ、それが結果としてどのように生

活体験を豊かにしたり、視野を拡大したりすることができるのか」（前掲論文^{2）}）という観点から教科書を調査している。そしてある「国語総合」教科書の絵から物語を作るという課題において、「音に属する問いかけは一切ない」ことや、太宰治「富嶽百景」の学習の手引きに「聴覚刺激を風景構成の材料とする発想がない」ことを指摘し、「小説を読むことでしか聴くことのできない〈音〉を聞き取ることが大切なのではないだろうか。」（前掲論文^{2）}）と述べられる。

では、「国語総合」採録の唐詩に描かれている情景は、学習の手引きなどによって、学習者の想像力をどのようににはたかせ、読み味わうことを求めているのだろうか。これについては、唐詩の情景描写の分析とともに、次節で整理・考察を行うが、その前に各教科書における学習の手引きと脚問の形式について、以下に簡単にまとめておく。

学習の手引きの形式は、

①唐詩の単元のまとめとして、採録しているすべての詩に同じ問いをする（ABCDEFGHIJLM）

②採録している詩を内容（自然・別離・愛情）で分けて、共通した問いをする（RS）

③それぞれの詩で問う（FIJKNOPQTVW）の三つに分けられる。ただし形式は変わっても、ほとんどの詩で作者の状況や心情が問われており、それと関連して自然の情景の描かれ方が問われる形になっている。

次に脚問は、学習の手引きで問われていることを考えるための糸

口として設定されていると考えられる。そのため問いとしては、各詩のポイントとなる語の意味やそれが指すもの、また各句の解釈を問うものが多い。ただし①の教科書では、詩によっては脚問が付されていない場合もある。

三 「国語総合」採録の唐詩における自然の情景描写

「国語総合」採録の唐詩は三八首あり、そのうち自然の情景が描かれているのは、三三首である。そしてこの三三首は、

(一) 自然の情景を視覚的に捉えた詩一八首

(二) 自然の情景を聴覚的に捉えた詩一首

(三) 自然の情景を視覚と聴覚で捉えた詩七首

(四) 自然の情景を視覚的に捉え、自然以外の音を聴覚的に捉えた詩七首

以下では、この(一)(二)(三)について、学習の手引きと脚問によって、どのようなことが問われているのか、ということを整理しながら考察したい。

(一) 自然の情景を視覚的に捉えた詩

王維「送元二使安西」三「三体詩」21 (BCDEFGHIJKLMNOP)

QRSTUVWXYZ^⑤

渭城朝雨浥輕塵、客舍青青柳色新
勸君更盡一杯酒、西出陽關無故人

この詩は、王維が西域に赴任する友人元二を渭城に送り、その無事を祈り、惜別の情を述べたものである。

この詩の第一句・第二句は、朝降った雨によって土埃が洗われた柳のみずみずしさを描くことで、元二が旅立つ朝のすがすがしさが強調されており、これには王維の友の旅立ちを祝し、旅の無事、職務遂行を願う思いも込められている。

したがって第一句・第二句をどのように想像するかが大切なのだが、「青青」とは何の色か(GH)、「柳色新」とあるがなぜか(IJ)、第一・二句は作者のどのような気持ちを表しているか(S)、という問いがある。

そして第三句・第四句について、「勸君」「更盡」や「西出陽關無故人」に込められた思いを問うことが多い(DENOPQVWUTU)。また「渭城」「陽關」の位置を地図で確かめさせる問いも多い(GHKLMVW)。

李白「静夜思」『唐詩選』15 (CDEFGHILMNOPQRSTU)

林前看月光、疑是地上霜、舉頭望山月、低頭思故鄉

この詩は、静かな秋の夜、寝台の前の白い月光を見、頭を上げて山月を見れば、故郷がしのばれるというもので、李白の視線の動きを追いながら(PQ)、その思いを読み取ることが大切である。その

ため第一句・第二句では、「月光」が籍に見えたのはなぜか（I）、
「牀前」に「月光」を「看」るのはなぜか（TU）、と李白の知覚の
過程と理由が問われ、第三句・第四句では、「山月」と「故郷」は、
どのように関連しているか（LMS）、とこの詩における月の働きを
考えさせながら、「低頭」に込められた李白の思いを問う（FNO）。

王之涣「登鸛鵲樓」『唐詩選』11（BDG I J L M R S V W）
白日依山尽、黃河入海流、欲窮千里目、更上一層樓

この詩は、王之涣が鸛鵲樓に登って、雄大な自然を眺めて感動し、
更に遠くまで見たくなり、もう一層上に登ったことをいうものである。

そのため王之涣が感動した情景を想像させるために、第一句・第
二句では、「依山尽」「入海流」とはどのような眺めか（D）、前半の
二句にはどのような情景が描かれているか（IJ）、第一句の表現か
らどのような光景を思い浮かべることができるか（LM）、と視覚的
に捉えた情景を確認する問いがなされ、その後第三句・第四句に込
められた作者の心情が問われる（SVW）。

杜甫「絶句」『唐詩選』6（I J P Q V W）

江碧鳥逾白、山青花欲燃、今春看又過、何日是歸年

この詩は、杜甫が色鮮やかな春が巡って来て、万物は生を謳歌し
ているのに、自分はなすこともなく日々を送り、いつになったら郷

里に帰れるのかと我が身の不遇を嘆くものである。

この詩において、第四句の「何日是歸年」に込められた思いを理
解する（VW）には、第一句・第二句の生き生きとした春の情景と、
それに対するあせりを読み取る必要がある。

そのため第一句・第二句について、色彩を表している言葉を抜き
出す（IJ）、表現上の特色を指摘する（VW）、と「江」「山」、
「碧」「青」「鳥」「花」、「逾」「欲」、「白」「燃」の対応を考えさせる
問いがある。

杜牧「山行」『三體詩』6（A I J K L M）

遠上寒山石徑斜、白雲生處有人家

停車坐愛楓林晚、霜葉紅於二月花

この詩は、杜牧が晩秋に人里を離れた山に登ると、頂上に人家を
見つけ、また山深い辺りで、夕日に映える楓林の美しさに感動した
ことを述べる。

杜牧の感動を読み取るため、作者はこの詩でどのような自然の美
しさを発見したのか（IJK）、作者は楓の葉について、どのような
ことを発見したのか（LM）、という問いがある。

また詩全体に描かれた情景について、「寒山」「石徑」「白雲」の寒
色系の色合いと、「楓林晚」「霜葉」「紅」「二月花」の暖色系の色合
いの対比を考えさせる問いもある（K）。

杜甫「月夜」『唐詩三百首』5（F L M R S）

今夜鄜州月、閨中只獨看、遙憐小兒女、未解憶長安
香霧雲鬢濕、清輝玉臂寒、何時倚虛幌、雙照淚痕乾

この詩は、賊に捕らえられて長安にいる杜甫が、秋の夜に月を眺め、乱を避けて鄜州にいる妻子を思い、再会はいつのことかと嘆くものである。

この詩において視覚で捉えた情景は、第一句の月のみである。そして杜甫が実際に眺めているのは、長安の空の月であるが、そうとわずに、妻が眺めているであろう鄜州の空の月を思い浮かべている。そのため首聯・頷聯を読解するために、「看」「憐」「憶」は、それぞれ誰の動作か（LM）、「未解憶長安」とはどういう意味か（S）、と主語を確認する問いがある。

そして作者の子どもに対する思い、妻に対する思いはどこにどのように表れているだろうか（F）、という問いがある。

李白「黃鶴樓送孟浩然之広陵」『唐詩選』 4 (BERS)

故人西辞黃鶴樓、煙花三月下揚州

孤帆遠影碧山尽、唯見長江天際流

この詩は、李白が春景色の中、孟浩然が揚州に下って行くのを見送った際の心情を詠んだものである。

まず第一句の「辞」の意味を確認する問い（E）があり、続いて第四句の「唯見」に込められた心情を考えさせる問い（E）や、作者の送別の気持ちはどこに最も強く表れているか（S）、といった問

いがある。

高駢「山亭夏日」『全唐詩』 4 (ANOP)

綠樹陰濃夏日長、樓台倒影入池塘

水精簾動微風起、滿架薔薇一院香

この詩は、夏の山荘の静かな情景を様々な感覚で表現したものである。

第一句では、夏の陽射しの強さ・まぶしさと、樹木の茂った様子を視覚的に捉えており、それを理解させるために、「綠樹陰濃」という表現から、どのような情景が思い浮かぶか（P）、という問いがある。

第二句では、樓台の影が逆さまに池の水面に映っている様子が視覚的に捉えられ、第三句では、微風によつて水晶の簾が揺れる様子が視覚的に（またかすかに聴覚的に）捉えられ、第四句では、薔薇の香りが庭の隅々まで広がる様子が嗅覚的に捉えられる。

このようにこの詩では、様々な感覚で捉えた情景が表現されているが、問いは視覚に限られ、聴覚や嗅覚についての問いはない。

杜甫「登岳陽樓」『唐詩選』 3 (E VW)

昔聞洞庭水、今上岳陽樓、吳楚東南坼、乾坤日夜浮

親朋無一字、老病有孤舟、戎馬闕南北、憑軒涕泗流

この詩は、念願であった岳陽樓に登った杜甫が、壮大な眺望の中

で、自らの漂泊と老いの嘆きと、国家への憂慮を述べるものである。前半の四句では、大自然に対する感動と人間の小ささを詠んでおり、具体的にどのような情景を眺めたのか、ということを理解させる必要がある。そのため「乾坤日夜浮」とは、どのような景観をいうか（E）、という問いが立てられる。

そしてまとめとして、前半と後半の内容の違いや、後半に作者のどのような心情が込められているか（VW）、という問いがある。

李商隱「登樂遊原」『唐詩三百首』1（K）

向晚意不適、驅車登古原、夕陽無限好、只是近黃昏

この詩は、心が晴れないまま、車を走らせて樂遊原に登った李商隱が見た、まさに沈みゆく夕日の美しさを詠んだものである。

問いは、まず作者はなぜ「古原」に登ったのか（K）、ということを確認し、樂遊原に登った作者が見たのはどのような情景か（K）、ということを問う。

以上の一〇首において、視覚的に捉えて描かれている自然の情景は、色鮮やかな植物、離ればなれの人の心をつなぐ月、大河・夕日といった壮大な自然である。そしてそれを見る作者の心情を考えていくのだが、学習の手引きや脚問に、彼らが視覚的に捉えた自然の情景に関する問いがあり、それを切り口として、学習者が想像し読み味わうことができるようになっていく。

またここに挙げなかった八首には、自然の情景に関する具体的な問いはないが、そのうちの四首では作者の状況を問うているので、

実際の教室では教師の発問として、作者が目しているものを問うのであろう。⁶⁾

(二) 自然の情景を聴覚的に捉えた情景

孟浩然「春暁」『唐詩選』13（ABCDEHKNOPTU）

春眠不覺曉、処処聞啼鳥、夜來風雨聲、花落知多少

この詩は、夜明けを知らずに眠っていた孟浩然が、鳥の声で目を覚まし、ふと昨夜は風雨が強かったことを思い出し、花がたくさん散っただろうと、過ぎゆく春を惜しむものである。

まず「不覺曉」とはどういうことか（DEU）、作者はどこにいてこの詩を詠じているか（E）、どのような状態のときに詠んだのか（NO）、と作者の状況を問う。

そして、作者が寢床で耳にしたものは何か（H）、ということを確認し、自然の音によってわき起こるその心情を、「聞啼鳥」とあるが作者はどのような気持ちで聞いているか考えなさい（PQ）、「夜來風雨聲」をどのような気持ちで聞いたのか考えてみよう（TU）、「花落知多少」には作者のどのような気持ちがかめられているか話し合ってみよう（H）、といった問いがなされる。またKには、一海知義氏による解説文が掲載されている。

このように、学習の手引きと脚問では、作者の状況や耳にした音によってどのような気持ちになるのか、ということが問われているが、聴覚の特性をより深く考えさせるような問いはない。⁷⁾

(三) 自然の情景を視覚と聴覚で捉えた詩

杜牧「江南春」『三体詩』5 (DFGRS)

千里鶯啼綠映紅、水村山郭酒旗風
南朝四百八十寺、多少樓台煙雨中

この詩は、杜牧が江南の美しうのどかな春景色を見ているうちに、昔仏教文化が栄えた南朝の都建康の風景が浮かんで来た、というものである。

第一句・第二句では、草木の「緑」、花の「紅」、酒旗の「青」と視覚で捉えたものと、「鶯」の鳴き声という聴覚で捉えたものによって、春の美しさ、のどかさを表現し、第三句・第四句では、霧雨のけふる古都のたたずまいを視覚的に捉えて表現する。

この詩の前半と後半の關係については諸説あり、前半を色彩画、後半を水墨画にたとえることもあるが、問いには、前半句と後半句の風景描写の違いとその理由を考えよう (F)、とある。

杜甫「登高」『唐詩選』3 (DLM)

風急天高猿嘯哀、渚清沙白鳥飛迴、無辺落木蕭蕭下、不尺長江滾滾來
万里悲秋常作客、百年多病独登台、艱難苦恨繁霜鬢、潦倒新停濁酒杯

この詩は、杜甫が重陽の節句に高台に登り、寂しい峡谷の秋の風景を眺めながら、生涯の不遇を嘆き悲しむものである。

前半の四句は寂しい秋の風景を、第一句で急な風音と猿の哀しげ

な声、第三句で風に吹かれて枝葉の落ちるもの寂しい音を聴覚的に表現し、第二句で「渚」「沙」の色や飛ぶ鳥の姿、第四句で尽きることなく流れる長江の様子を視覚的に捉えて表現する。

そして後半四句では、そのような自然を前にした杜甫の思いが述べられるが、問いは、前半と後半の内容の違いを考えさせる (DLM)。

ところでここに挙げた杜牧「江南春」と先の孟浩然「春暁」に描かれる鳥の声は、春の心地よさや春爛漫を象徴するものであり、古くは『詩経』にその例が見られる。また杜甫「登高」に描かれる「猿声」は、三国から六朝初期にかけて、秋の悲哀や旅愁を駆り立てるものとして一般化したとされる。

これらの音は、それぞれの情景を構成する要素として、中国古典詩に多く詠まれてきたが、そのような(音)の文化的・社会的コードともいべきものを、そのように「き(聴・聞)」かないテキストの主体がいる。

劉廷芝「代悲白頭翁」『唐詩選』1 (I)

洛陽城東桃李花、飛來飛去落誰家、洛陽女兒好顏色、行逢落花長歎息
今年花落顏色改、明年花開復誰在、已見松柏摧為新、更聞桑田變成海
古人無復洛城東、今人還對落花風、年年歲歲花相似、歲歲年年人不同
寄言全盛紅顏子、應憐半死白頭翁、此翁白頭真可憐、伊昔紅顏美少年
公子王孫芳樹下、清歌妙舞落花前、光祿池台開錦繡、將軍樓閣画神仙
一朝臥病無相識、三春行樂在誰邊、宛轉蛾眉能幾時、須臾鶴髮亂如絲
但看古來歌舞地、惟有黃昏鳥雀悲

この詩は、若い女兒と白頭翁を対比させることによって、人生の衰え易いことを嘆いたものである。

視覚的に捉えた落花の情景から話が展開しているため、なぜ落花にあつたため息をつくのか、詩中に繰り返し用いられている言葉を抜き出せ、と落花に着目させる問い（I）がある。また他に、第七句・第八句は、どのようなことを言っているのか、なぜ「半死白頭翁」を「応憐」と言っているのか（I）、という問いがある。

嚴密に言えば、最後の二句に描かれるのは自然の情景ではないが、かつて歌舞で賑わった洛陽城の東の地の寂しいたずまいを、夕暮れ時の小鳥たちの悲しげなさえずりがあるだけだ、と表現しているのは注目してよいであろう。

杜甫「春望」『唐詩三百首』14（BCDE I J K N O P Q R S U）

国破山河在、城春草木深、感時花濺淚、恨別鳥驚心

烽火連三月、家書抵萬金、白頭搔更短、渾欲不勝簪

この詩は、人間の世界で戦乱の続く中でも自然は変わらず循環してきて、そんな春にもかかわらず悲しい思いが募り、やまぬ戦乱や家族との別れに心を痛め、老いていく我が身を嘆くものである。首聯では、視覚的に捉えた春の情景を表現しており、人間と自然を対比しているため、「破」「在」の意味を問う（I J K U）。

頷聯では、本来ならば楽しい春の花を見ても涙が流れ、鳥の鳴き声を聞いても心がビクッとすることを述べる。ここでは、視覚と聴覚で春の風物を描いており、問いで「花濺淚」「鳥驚心」の意味を問

う（S）ことは、杜甫の心情を理解する上で重要であろう^①。

そして頷聯では、前半の「時」「別」を我が身に引きつけており、その理解のために「烽火」は、何を象徴しているのか（N O）、なぜ「家書」は「万金」に相当するのか（I J K）、という問いがあり、尾聯の「白頭搔更短」に込められた思い（D E P Q R S U）や、「欲不勝簪」の意味を問う（P Q）。

李白「早發白帝城」『唐詩選』6（G H L M V W）

朝辭白帝彩雲間、千里江陵一日還

兩岸猿聲啼不盡、輕舟已過萬重山

この詩は、流刑であった李白がその途中で大赦にあい、早朝に白帝城を出発して、千里下流の江陵までたった一日で帰る際の情景とその喜び、スピード感を詠んだものである。

問いは、色の対比（H）、数を表す言葉の対比（H）、「輕舟」と「萬重山」の対比（V W）がなされていることについて、その表現効果を問う。そして作者の移動距離を地図で確認させる（G H）ものもある。

これらの問いは、視覚的に捉えた情景に着目したものであり、これによつてその喜びやスピード感はある程度読解できるであろう。だがさらに言えば、本来悲しみを誘うものであった「猿声」が、どのように聞こえているのか、ということも考える必要があるのではないか。

以上のように、劉廷芝「代悲白頭翁」と杜甫「春望」は鳥の鳴き

声を、李白「早発白帝城」は「猿声」を、文化的・社会的コードとは異なる（音）として「き（聴・聞）」にしている。したがってこのように描かれた自然の音に着目して、テキストの主体が世界をどのように把握しているのかを考え、その「心」に迫る読みを行うのは、重要である。

柳宗元「江雪」『唐詩三百首』16 (A B C D E G H I J K N O P Q R

S)

千山鳥飛絶、万径人蹤滅、孤舟蓑笠翁、独釣寒江雪

この詩は、厳しい雪景色の中、蓑笠を着けた翁が江に小舟を浮かべて、釣り糸を垂れる孤独な姿を詠む。

問いは、まず第一句・第二句の情景について問うもの（H K）や、雪が降っているということを理解させるために、鳥や人の姿が見えないのはなぜか（I J）、といったものがある。

そして第三句・第四句では、作者の姿が翁に投影されていることをふまえ、「孤舟」とはどのような舟か（E）、「蓑笠翁」とは誰のことか（N O）、といった問いや、「独釣寒江雪」について、作者の心情がどのように反映されているか（D E H K）、という問いがある。

この詩に描かれた情景については、これまで実景か心象風景かという議論がなされているが、稿者が注目したいのは、この詩に描かれているのは、降りしきる雪を除けば、動くものは何もない音の消えた世界であるということである。つまりこの情景を画のように理解するだけでは感じられない、静寂に包まれた世界がそこに広がっ

ているのである。そしてこの無音ということをつまみえないと、テキストの主体の「心」に迫ることができないのではないだろうか。

杜甫「春夜喜雨」『杜工部集』1 (A)

好雨知時節、当春乃發生、隨風潛入夜、潤物細無聲
野徑雲俱黑、江船火獨明、曉看紅濕處、花重錦官城

この詩の前半四句は、降るべき時を知り、春に万物を生育させる雨が、風に吹かれながら闇の中にしのび、ものを潤して音もなく細やかに降ることを言う。後半四句は、小道が雲によって黒く閉ざされている中、漁り火だけがぼつんと光る様、そして翌朝に紅が雨に濡れそぼっているのを見て、錦官城の花も雨に濡れて重厚さをたたえているだろう、と想像することを言う。

問いは、詩にうたわれている状況・心情はどのようなものか（A）、である。

杜甫には雨を詠んだ詩が多いことから、それらを考察する必要がある、また杜甫以前の詩において、雨がどのように詠まれてきたのかということ調べる必要がある。しかし細やかな雨が潜かに音もなく降ることについて、学習者に想像させるのは、雨を喜ぶテキストの主体の「心」に迫る上で、ポイントになる。

この二首は、無音の世界を描いたものである。聴覚的に捉えた自然の情景を考える際、我々はどうのような音か、ということに着目することが多いであろう。しかし音のない情景を描いている、ということを重視した上で、テキストの主体の「心」に迫ることは、大切

なことであろう。そしてそれは、音にあふれた世界に住む我々に、「き（聴・聞）く」ことについて考えさせるきっかけの一つとなり得るのではないだろうか。

以上、自然の情景を視覚と聴覚で捉えた詩七首を見てきたが、これらの学習の手引きと脚問では、杜甫「春望」の「恨別鳥驚心」への問い以外に、聴覚に関する問いはなかった。

それは杜甫「春望」では、「破」「在」「烽火」の意味を問い、李白「早發白帝城」、杜牧「江南春」、杜甫「登高」では、自然の情景を視覚的に捉えた色の対比がなされているため、詩を読み味わう際に、視覚的な情景に注目してしまいがちになることが影響しているのかも知れない。

しかし自然の音に着目し、〈音〉の文化的・社会的コードとのずれや無音の意味について考えることは、読みを立体化し、テキストの主体の「心」に迫っていくことに有効で、重要なことなのではないだろうか。

四 小結と今後の課題

ここまで「国語総合」採録の唐詩を、(一)自然の情景を視覚的に捉えた詩、(二)自然の情景を聴覚的に捉えた詩、(三)自然の情景を視覚と聴覚で捉えた詩、に分類し、その学習の手引きや脚問について整理してきた。

その結果言えることは、視覚に着目させる問いが多く設けられるのに対し、聴覚に着目させる問いがほとんど見られないということ

である。

人間は視覚優位の文化の中で生活しているため、自然の情景を描く際には、視覚で捉えた情景が中心になり、結果それに着目する問いが増え、聴覚への問いが少なくなるのは当然のことかもしれない。また作風や出典となる『三体詩』『唐詩選』『唐詩三百首』の編纂に関する問題、そしてこれらが日本に伝わり、どのように読まれてきたのかということ、さらに「国語総合」に採録される唐詩の、教材としての歴史や意義なども考えなければならぬだろう。

もちろん学習の手引きや脚問に問いが記されていないだけであって、実際の教室では、教員の発問によって補われていくことも想像できる。ただ唐詩の〈風景〉を学習者が立体的に読む、ということ を考えると、現行の「国語総合」教科書の学習の手引きと脚問では、少し心許ない。

では、具体的にどうするのか、というのが問題であるが、それについては、今後の課題としたい。ただ〈音〉の文化的・社会的コードの問題も含め、音が作り出す〈風景〉を考える学習を通して、学習者の読みを立体化し、テキストの主体が世界をどのように把握し、そこに主体のどのような「心」を読みとることができるのかを、学習者に考えさせるような学習を今後は考えてゆきたい。そしてそのような学習を通して、我々は世界をどのように把握しようとしているのかを考えることも重要であろう。

自然の音に限ったため、今回考察することは出来なかったが、「国語総合」には、自然の情景を視覚的に捉え、自然以外の音を聴覚的に捉えた詩が七首採録してある。そこには自然を視覚的に捉えた中

で聞こえる歌曲、鐘の音、別れの場面で嘶く馬の声などが表現されている。¹³⁾ また李白「春夜洛城聞笛」「唐詩選」2 (I-J)「誰家玉笛暗飛聲、散入春風滿洛城、此夜曲中聞折柳、何人不起故園情」のように、暗闇から聞こえてくる笛の音によって、わき起こる感情を述べるものもある。これらの音、またそれぞれの〈音〉の文化的・社会的コードの問題など、「国語総合」採録の唐詩における音について、総合的に考察しなければならぬが、それは稿を改めて論じることにした。

最後に、本稿は「き(聴・聞)く」ことを考察している稿者ゆえの偏った考察になってしまっているかも知れない。ここに書き記し、公にすることによって、諸賢のご批評を仰ぐことが出来れば幸いである。

注

① 拙稿「西晋の詩における自然の音について」(『中国中世文学研究』第53号・08年3月・pp. 20-35)、「詩経」における自然の音について(『中国学研究論集』第20号・08年3月・pp. 1-13)、「楚辞」における自然の音について(『中国中世文学研究』第54号・08年6月・pp. 19-33)

② A 2 東書・国総301新編国語総合、B 2 東書・国総302精選国語総合

C 2 東書・国総304国語総合古典編、D 15 三省堂国総306高等学校国語総合古典編

E 15 三省堂国総307精選国語総合、F 15 三省堂国総308明解国語総合

G 17 教出国総309国語総合、H 17 国総310新編国語総合言葉の世界へ

I 50 大修館国総312国語総合古典編、J 50 大修館国総313精選国語総合

③

K 50 大修館国総314新編国語総合、L 104 教研国総316国語総合古典編
M 104 教研国総317高等学校国語総合、N 117 明治国総318高等学校国語総合
O 117 明治国総320精選国語総合古典編、P 143 筑摩国総322精選国語総合古典編
Q 143 筑摩国総323国語総合、R 183 第一国総325高等学校新訂国語総合古典編
S 183 第一国総326高等学校国語総合、T 183 第一国総327高等学校標準国語総合
U 183 第一国総328高等学校新編国語総合、V 212 桐原国総330探求国語総合古典編
W 212 桐原国総331国語総合

全三八首。採録数の多い順。同数の場合は生年の早い順。

(一) 自然の情景を視覚的に捉えた詩一八首

王維「送元二使安西」21、李白「靜夜思」15、王之渙「登鸛鶴樓」11、杜甫「絶句」6、杜牧「山行」6、杜甫「月夜」5、李白「黃鶴樓送孟浩然之廣陵」4、高駢「山亭夏日」4、杜甫「登岳陽樓」3、韋應物「秋夜寄丘二十二員外」3、李白「望廬山瀑布」2、杜甫「旅夜書懷」2、耿漳「秋日」2、王昌齡「芙蓉樓送辛漸」1、孟浩然「臨洞庭」1、李白「山中與幽人對酌」1、李白「峨眉山月歌」1、李商隱「登樂遊原」1

(二) 自然の情景を聴覚的に捉えた詩一首

孟浩然「春曉」13

(三) 自然の情景を視覚と聴覚で捉えた詩七首

柳宗元「江雪」16、杜甫「春望」14、李白「早發白帝城」6、杜牧「江南春」5、杜甫「登高」3、劉廷芝「代悲白頭翁」1、杜甫「春夜喜雨」1

(四) 自然の情景を視覚的に捉え、自然以外の音を聴覚的に捉えた詩七首

王翰「涼州詞」13、白居易「八月十五日夜禁中獨直對月憶元九」12、白居易「香奩山下新卜山居草堂初成偶題東壁」9、李白「送友人」4、張繼「楓橋夜泊」2、王維「竹里館」1、李白「贈汪倫」1

(五) その他五首

李白「春夜洛城聞笛」2、杜牧「贈別」2、賀知章「回鄉偶書」1、王維「九月九日憶山東兄弟」1、于武陵「勸酒」1

④ 各詩の解釈については、松浦友久編『校注唐詩鑑賞辭典』(大修館書店・87年11月)、森野繁夫「漢文の教材研究漢詩編(一)」(溪水社・88年1月)・『(二)』(『(一)』(89年9月)、鎌田正・田部井文雄監修『研究資料漢文學詩I』(明治書院・93年4月)・『詩II』(『(一)』94年6月)・『詩III』(『(一)』93年1月)、漢詩・漢文教材研究会編『漢詩・漢文解釈講座漢詩I~IV』(昌平社・95年5月)などを参考にした。

⑤ 作者名・詩題・出典の後の数字は、採録している教科書の数を表す。

⑥ 韋応物「秋夜寄丘二十二員外」『唐詩選』3 (KOP)「懷君屬秋夜、散步詠涼天、山空松子落、幽人忘未眠」「君」は、誰をさすか、作者が第四句で「幽人忘未眠」といつているのはなぜか。(K)。「幽人」が眠らないのはなぜか、考えなさい。(PQ)。

李白「望廬山瀑布」『李太白文集』2 (BC)「日照香爐生紫煙、遙看瀑布挂前川、飛流直下三千尺、疑是銀河落九天」それぞれの詩にうたわれている状況・心情はどのようなものか (BC)。

杜甫「旅夜書懷」『唐詩選』2 (GH)「細草微風岸、危檣獨夜

舟、星垂平野闊、月湧大江流、名豈文章著、官因老病休、飄飄何所似、天地一沙鷗」自然の情景や作者の心情がどのように描かれているか (G)。作者は自分の姿を何にたとえているか。また、この詩から作者のどのような境遇が読み取れるか (H)。

耿湊「秋日」『唐詩選』2 (NO)「返照入闌巷、憂來誰共語、古道少人行、秋風動禾黍」作者の心情を簡潔にまとめてみよう (NO)。

李白「峨眉山人月歌」『唐詩選』1 (A)「峨眉山人月輪秋、影入平羌江水流、夜發清溪向三峽、思君不見下渝州」詩にうたわれている状況・心情はどのようなものか、「君」とは、何を指すか (A)。

王昌齡「芙蓉樓送辛漸」『唐詩三百首』1 (C)「寒雨連天夜入湖、平明送客楚山孤、洛陽親友如相問、一片冰心在玉壺」詩にうたわれている状況・心情はどのようなものか (C)。

孟浩然「臨洞庭」『唐詩選』1 (D)「八月湖水平、涵虛混太清、氣蒸雲夢泣、波撼岳陽城、欲濟無舟楫、端居恥聖明、坐觀垂釣者、徒有羨魚情」「欲濟無舟楫」とは、どのようなことをたとえているか、詩の前半と後半とは、どのような違いがあるか、詩に表現されている情景や心情について、整理してみよう (D)。

李白「山中與幽人對酌」『李太白集』1 (K)「兩人對酌山花開、一杯一杯復一杯、我醉欲眠卿且去、明朝有意抱琴來」「兩人」とは、誰と誰をさすか、「有意」の「意」とは、どのような気持ちか (K)。

⑦ 拙稿「漢詩における聴覚的表現—孟浩然「春曉」を手がかりに

して―」〔国語教育研究〕第49号・08年3月・pp. 69-77) 参照。

⑧ 森野繁夫『漢文の教材研究漢詩編(二)』(溪水社・90年9月・p. 143)

⑨ 『詩経』幽風「春日載陽、有鳴倉庚」(春日 載よち陽に、鳴く倉庚有り)

⑩ 『猿声』については、松浦友久「猿声」考」〔詩語の諸相〕研文出版・81年4月・pp. 18-40) 参照。

⑪ 「花濺涙」「鳥驚心」について、主語は杜甫として解釈したが、吉川幸次郎氏は花と鳥が主語であると解釈されている。〔新唐詩選〕岩波新書・52年8月・p. 20)

⑫ 渡辺英喜「柳宗元「江雪」詩小考―その解釈をめぐって―」〔新しい漢字漢文教育〕第37号・03年11月・pp. 9-20) に詳しい。

⑬ 王翰「涼州詞」〔唐詩選〕13 (BCDEFGILMPQVW)「葡萄酒夜光杯、欲飲琵琶馬上催、醉臥沙場君莫笑、古來征戰幾人回」

白居易「八月十五日夜禁中獨直對月憶元九」〔白氏文集〕12 (BCLMNOPQRSVW)「銀台金闕夕沈沈、獨宿相思在翰林、三五夜中新月色、二千里外故人心、渚宮東面煙波冷、浴殿西頭鐘漏深、猶恐清光不同見、江陵卑濕足秋陰」

白居易「香奩峰下新卜山居草堂初成偶題東壁」〔白氏文集〕9 (DEFGHIJTU)「日高睡足猶慵起、小閣重衾不怕寒、遺愛寺鐘欹枕聽、香爐峰雪撥簾看、匡廬便是逃名地、司馬仍為送老官、心泰身寧是歸處、故鄉何獨在長安」

李白「送友人」4〔唐詩選〕(PQVW)「青山橫北郭、白水遶

東城、此地一為別、孤蓬萬里征、浮雲遊子意、落日故人情、揮手自茲去、蕭蕭班馬鳴」

張繼「楓橋夜泊」〔唐詩選〕2 (VW)「月落烏啼霜滿天、江楓漁火對愁眠、姑蘇城外寒山寺、夜半鐘聲到客船」

王維「竹里館」〔唐詩選〕1 (B)「獨坐幽篁裏、彈琴復長嘯、深林人不知、明月來相照」

李白「贈汪倫」〔李太白文集〕1 (A)「李白乘舟將欲行、忽聞岸上踏歌聲、桃花潭水深千尺、不及汪倫送我情」(福岡県立鞍手竜徳高校)